



風の便り 36

2021(令和3)/11/15.
船橋市浜町 辻 秀幸

今宵はプラスチックモデルのお話し。

プラモ

小学上級の頃、飛行機雑誌にアメリカの競技機の平面図が出ていた。作ってみたくなった。庭にあった杉の角材や板材の切れ端をナイフで削った。つまりソリッドモデル作りだ。しかし相手は杉だ。模型作りに向いている筈がない。そんなこと知る前のことで、翼と胴体をつなげるのに知恵を絞り出しつつなんとかヒコキーらしいモノができた。我ながら不細工だなあとはい思ったが、うれしかった。達成感だ。

やがて飛行機雑誌にソリッドモデルの記事が開始した。朴だかなんだから細工に向いているという木材を手に入れ、ナイフで削る。熱心な大人は便利な工具を駆使する。角材から円柱状の胴体や、厚さに変化がある翼を仕上げるのはナイフ一丁では無理な話。

ということ、横、上から見ただけのシルエットに切ったあるキットが販売された。何機か作った。縮尺は50分の1だったのだ、全長10メートルなら20センチの模型となる。ナイフで細工するにはこの位の大きさが事煩いだろう。

「雷電」という旧日本軍の戦闘機のキットで、脚の出入れ、補助翼などの可動化に挑んだ。キットには用意していないので、完全手作り。武骨ではあ

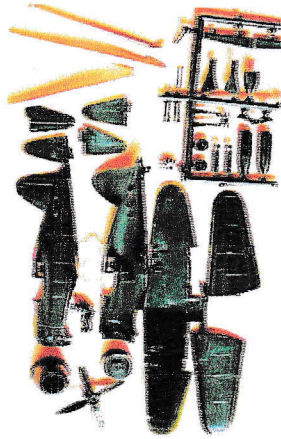
浜町・風の便り 36
るが、可動部分あちこちあるよ、というスケール模型が作れた。

雑誌には、実機の写真が、と見間違えるような美麗な作品が紹介されるようになった。評や作者のコメントから察するとキットからの作品もあるが、一からの手作りもあるらしい。

町にプラスチックモデル、つまりプラモのキットを売る店が現れた。説明書通りに組んで糊付けすればハイ出来上り。ソリッド育ちの身としては邪道だと思っただけにバカにした。オモチャじゃねえか。

これも雑誌に載るようになった。バカにしていられなくなった。図面とか実機の写真とかから受けるイメージとここがわずかに違うから直したとか、販売されてないタイプに改作するとか、塗装を、実在したそれとどこかで乗った機体のものにしたとか、そういう作品を見せられると、オモチャとバカにしていられなくなった。

下写真は最後に買って作るチャンス失ったキット。今のプラモも似たようなものかな。ソリッドでも作ったことのある「雷電」。日本の空からいつくき敵を駆逐することを期待して採用された迎撃戦闘機。購買意欲を書き立



てる絵が描いてあるキットの箱が下写真。



このキットは72分の1なので、全長9.695mのこの機体は13.5センチほどに仕上がる。

飛ばすことは出来ない。

ドローン

飛行機のプラモは飛ばすことは念頭がない。ヘリコプターならひよっとして部屋の中で飛ばせるように出来るかもしれない。模型技術書やオモチャ業界もそう考えたらしく、やがて飛ばして遊ぶおもちゃのヘリコプターがちらほらと現れた。モーターが小さく軽く強くなったわけだ。

弟へのプレゼントにそういう一つを選び、自分用にも買った。赤外線によるラジコン方式のオモチャ。ポーンと飛び上がったかと思うと、ストンと落ちたり、コントロールが難しい。コントローラーの電池はすぐ使い切る。電池をたくさん用意しておく必要がある。(右写真)

しばらくすると、コントロールが容易な、もっと小さい商品が現れたが、その頃の私はヘリコプターのオモチャで遊ぶ余裕はなくなっていた。

プラモやオモチャとは違分分野で、

浜町・風の便り 36

小型のヘリコプターが研究された。ヘリコプターというよりはプロペラを上向きに備えた、ヘリコプター型の飛行物体というべきだろうか。ドローンである。ラジコンでエンジン付きの模型飛行機を飛ばすことはかなり前から楽しまれていたもので、そういった技術との組み合わせ、延長だろう。

ドローンというと、米軍が開発した無人偵察機や爆撃機を想起する。操縦者側は被害最少、標的とされる側は恐怖最大という兵器で、前進オンリーの飛行機型。

テレビで、ドローンが上空からモミジやサクラの絶景を紹介する番組がある。日本の狭い田畑への種や薬剤の散布もやりやすいだろう。民間用に街中から荷物や人を運ぶ手段としてヘリコプタースタイルのドローンの開発が進んでいる。

自家用車と軽飛行機の組み合わせは昔から夢の乗り物として実験的に何度もつくられてきた。いよいよ現実となるのも近そうだ。

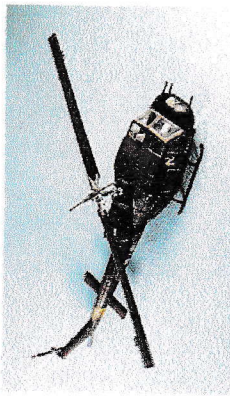
ヘリ型のドローンをリモコンでスピードと正確さを競う遊びが一部で盛んらしい。こういう遊びからドローンは進化していくのだろう。テレビで見たことがあるが、めまぐるしくせわしな



リモコンヘリオモチャ。本体甲斐なし前に2本のすき間があるのが見えるだろうが、ここにモーターがある。

くて、私の好みではない。

オタマジャクシ



ヘリコプターは好きではなかったの
で作る気はなかった。好きなヒコーキ
を一通り作った後、種類を揃える意味
で一つつくるかと、選んだのが上写真の
ベル UH-1 イロコイ。作ってみたらオ
タマジャクシのように可愛かった。図
面や写真から受けるイメージと随分違
うので驚いた。

図面と立体とは印象が異なる。だ
から建物でも都市計画でも、図面だけ
でなく模型を作ることは大事なことな
んだろう。

回転翼が薄く細長く、支柱やアンテ
ナ類も細い。扱いに注意が必要。少しさ
わったぐらいでは壊れない程度の強さ
の材料が使えるようになったのだろう。
イロコイとは色恋ではない。アメリ
カ先住民の部族名で、ほかにチヌーク、
アパッチ、シャイアンといった名も使
われている。

でかい

大型のヒコーキにも手を出した。第
2 次大戦中に出現した超大型爆撃機と
して、ヨーロッパでナチス軍の高射砲
や戦闘機に、乗員ともども痛めつけら
れた米陸軍の爆撃機 B-17。戦争映画

浜町・風の便り 36

の名作「頭上の敵機」の主役。「メン
フィス・ベル」もいい映画だった。

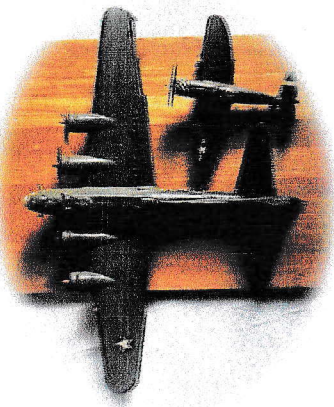
4 発で、73 分の 1 で全長 32 呎、全
幅 44 呎ほどになる。細長い棒状の胴
体だけならどうということはないが、
翼が左右に突っ張っているのかさば
り、我が家には置き場所がない。

作ってみて驚いたのは主翼の広く大
きいこと。胴体は細いが、爆弾という
重い物を積んで運ぶので、当時のエン
ジンの力では広い翼が必要だった。現
在飛んでいる、図太い胴体の大型旅客
機の翼は随分小さい感じを受ける。

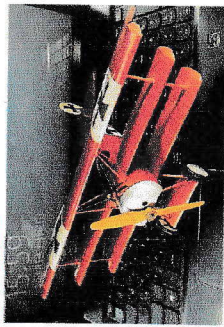
下写真の、脇の単発機は米陸軍の
P-47 という「大型」戦闘機。

この B-17 はヨーロッパ戦線で使わ
れた。日本の空を悠々と飛んだのはも
っとでかい B-29。

高射砲も雷電も届かない高さを、無
塗装のジュラルミンを輝かせて飛ぶ姿
を美しいと、鬼畜と罵ることを忘れて
見とれたのは、私より上の大人。鬼畜
めと罵んだ相手に、あれこれありなが
らも守られて七十有余年。スマホにど
つぶりの皆さんは日本とアメリカとが
戦争したことを知らないらしい。



赤い悪魔



複葉機も魅力がある。ソリッドの時
にも何機か作ったが、大変。翼を支え
る支柱は、実物とおりの縮尺にするど
かなり細くなってしまふ。さらに実機
には補強のためのワイアが張られてい
る。これらを再現しようとする、大
変。いまほど強力な接着剤のない時代
には至難の技であった。

プラモの時代になると、あらかじめ
ホゾ・ホゾ穴などが用意されていて、
材料も軽いので、簡単に組み立てられ
るようになった。

作った一つが上写真の、ヒコーキブ
ランには有名な三葉機フォッカー Dr-
I。実機の全長は 6 呎に足りないのに
72 分の 1 では 8 呎ほどにしかならな
い。オモチャ感が強くなる。実機の雰
囲気を感じたかったので、28 分の 1
のキットを選んだ。全長 21 呎、全幅
26 呎ほどに仕上がる。ほぼ実機のよ
うに再現することができるキット。

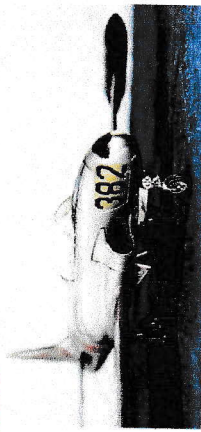
この機体は、第 1 次大戦初期にリヒ
トホーヘンが赤く塗った機体で英仏を
恐れさせた機体。性能はさほど優れて
いなかったが、パイロットが優れてい
ると、くるくる軽快にまわって英仏の
パイロットを翻弄した。

当時のエンジンは力が弱く、浮かぶ

浜町・風の便り 36

ためには広い翼が必要だった。どうし
ても横に長くなってしまふので、2 分
割して上下に重ねることが普通に行わ
れた。複葉である。戦闘機のようにく
るくる回るのには翼の横幅は短い方が
良い。そこで複葉よりさらに短くしよ
うと 3 分割するアイデアが生まれる。
工作が難しそうだが、飛んでるうちに
翼が吹っ飛んだというような事故は無
かったようだ。そのくらの技術や材
料は持っていたわけだ。

尻もち



ジェット機代表として、大戦後実用
化した米国のジェット戦闘機 P-80 を
元に造られた練習機 T-33 を組立てた。
この練習機は航空自衛隊でも採用した。
昨日の敵は今日の友、なんちゃってね。

このキットは、そのまま組み立てて
地上姿勢にするとお尻をついて「事故
機」になってしまう。機首にバチンコ玉
を入れた。飛行中の姿にしたい場合は、
車輪をつけず、スタンドポストという
支柱に乗せて観賞、ニンマリする。平和
である。

一方、威嚇するようにあるいは秘か
に、領空を窺う機影にスクランブルし
なければならぬ現実がある。プラモ
見てにやついていられるのは、実は奇
跡なのかもしれない。